

《 1年目の修理作業、ついに最終工程！ 》

絵金蔵に収蔵の高知県保護有形文化財に指定された芝居絵屏風 23 隻のうち、未修理の 18 隻における本格的な保存修理事業を実施しています。2019 年度は以下の 4 隻、**残りの 14 隻は次年度以降に順次修理していきます。**

修理作品

- ・花衣いろは縁起 鷲の段（本町二区所蔵）
- ・伊達競阿国戯場 累（本町二区所蔵）
- ・東山桜荘子 佐倉宗吾子別れ（本町二区所蔵）
- ・播州皿屋敷 鉄山下屋敷（横町二区所蔵）

助成金

- ▼以下の助成を受けて実施しています。
- ・文化財保護活動助成 / (公財)朝日新聞文化財団
 - ・美術品修復事業助成 / (公財)出光文化福祉財団
 - ・文化財保存修復助成 / (公財)文化財保護・芸術研究助成財団

本格修理の工程 ▶▶▶

補修と補彩



▲①修理前



▲②旧補修紙の除去



▲③補修（新補修紙の貼付）



▲④補彩後

本紙の一部が破れて欠失している箇所には、補修紙を貼付することによってその穴を塞ぎ、補修紙へ補彩を行います。今回、過去の修理において欠失部に補彩が施されている場合（露出している旧裏打紙または旧補修紙への補筆等）、表現に繋がりがあリ視覚的に違和感が少なく、また今後悪影響を及ぼす可能性が低いと判断された箇所はそのまま残すことを基本方針としました。

画像は「伊達競阿国戯場 累」右上部分の修理前後の様子です。大きな欠失部の穴を覆い隠すように本紙表面から灰色の紙が貼付されており、視覚的な違和感が生じていましたが、調査によりでんぷん糊で貼られていることから水で剥離可能と判断されたた

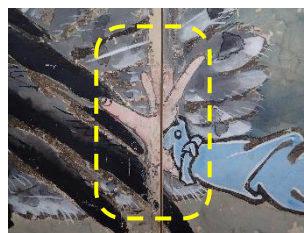
め慎重に取り外し、欠損部には裏面から補修紙を貼付しました。新たに補修紙を添付する場合や旧補修紙を残す際、本紙との重なりが最小限となるよう整えることが重要です。その後の補彩においては、新たに描線を書き足すことや周辺部と同じ色で塗りつぶすことはせず、地色を基調とした周辺部と調和する程度の彩色を施しました。

本格修理の工程 ▶▶▶

表装と仕上げ



▲修理前



▲修理後

最終工程として修理を終えた本紙を新調した屏風下地へ貼り込みます。修理前は全ての作品において、蝶番折り曲げ部（左隻と右隻の繋ぎ目）の画面が過去の修理時に一部が隠れるように貼り込まれていたため、可能な限り表へ見えるように再装幀しました。

その後、作品を構成する各種表装部材を取り付けます。大縁・小縁へは伝統的な様式で織られた裂地を選定、襲木（周囲へ取り付けられた縁木）と屏風金物は新調することとしました。屋外展示における襲木の損傷防止のために床に接する襲木の下側に保護金具として丸鋳を数個取り付けます。これで全ての工程が終了し、屏風装へ仕立て上げられました。

2019年度の修理作業・芝居絵屏風4隻の修理が無事完了！

2019年4月から始まった「芝居絵屏風の本格的な保存修理事業」の1年目作業・芝居絵屏風4隻の修理が2020年3月末で完了し、この約1年間かけた修理において、作品画面の損傷や経年により付着していた汚れ及び襲木や金具の破損等が解消され、伝統的な様式に則った姿へと成り代わりました。これらの作品は今後も祭礼の場や絵金蔵、その他様々な場所で展示され、高知が誇る絵金文化を後世へ伝えていく担い手となるでしょう。絵金の芝居絵屏風のような伝統的な形式をもつ作品は勿論、近代及び現代美術家による個性豊かな材質や形態をもつ作品においても修理や保存方法を見直す時期は必ずやってきます。その作業の必要性への理解に加え、日々模索しながら作品と向き合っている修理する職人や研究者、保存管理者等の存在を知る人々が増えることは、今後多くの作品が守り伝えられる未来へと繋がります。これらの直接目に触れる機会の少ない要素を、個人個人が作品と接する中で少しでもご留意いただけたら幸いです。



奇才 江戸絵画の冒険者たち

10年ぶりに展覧会へ出展します。
修理後の芝居絵屏風4隻を初公開！
【詳細は <https://kisai2020.jp/>】

(2020年5月 絵金蔵)